

様々な教育機関における「ちょこっと多読」～アメリカ北東部7校の実践報告

## Exploring the Benefits of “Tity *Tadoku*”: Practical Insights from Seven Schools across the Northeastern United States

多読(栗野他 2012)は言語学習法の一つとして、また、近年は、それが学習にもたらす言語面と精神面(クック・高橋 2022)への効果が注目され、日本語教育に取り入れる教育機関が増えている。これまでに、授業単位となる多読クラス(瀨瀬 2021)や有志が集まる多読クラブ(松田 2018)、また、通常日本語授業内で継続的に7～10分程度の多読をする「ちょこっと多読」(クック・高橋 2022)の実践報告がある。「ちょこっと多読」の狙いは、通常授業内で短時間多読を継続、習慣化する環境を設けることで、学習者の誰もが多読を体験できるようにすることである。本発表は、私立・公立総合大学、リベラルアーツ、公立中学・高校という、規模や形態、また導入の動機が異なる7校の日本語コースで行った「ちょこっと多読」の実践報告である。実施期間は2022年9月から2学期間、各クラスの経緯や結果について報告する。「ちょこっと多読」導入の利点として、ナショナルスタンダードに基づいたコースデザインを可能にし、また、クラス運営の一貫として、現存のカリキュラムを変更せずとも、学習者の日本語インプットを増やし、読みの流暢さを徐々に高めていける点が挙げられた。さらに、活動の頻度や多読リソースの量的な差にかかわらず、そのクラスの状況に応じて行うことができることも報告された。

最後に、学期末学生アンケート結果から「ちょこっと多読」を経験した学習者の声をまとめ、教師らの振り返りから、本活動を取り入れるコツや今後の課題などを多角的に検討する。日本語教育機関の多様な形態や実情に見合う「ちょこっと多読」のメリットを提唱したい。